田園調布学園大学大学院人間学研究科
子ども人間学専攻教職課程履修規程

（目的）

第１条　この規程は、田園調布学園大学大学院学則（以下「学則」という。）第 37 条に基づき、田園調布学園大学大学院人間学研究科（以下「本研究科」という。）における教職課程の履修に関し、必要な事項を定める。

（免許状の種類）

第２条　本研究科において取得できる教育職員免許状の種類は次のとおりとする。

子ども人間学専攻

幼稚園教諭専修免許状（以下「免許状」という。）

（免許状授与の所要資格）

第３条　免許状授与の所要資格を取得しようとする者は、学則第 40 条に定める修士課程を修了し、かつ、教育職員免許法（平成２８年法律第８７号）及び同法施行規則（平成２９年文部科学省令第４１号）に定める所要の単位を修得しなければならない。

２　前条に規定する免許状を取得しようとする者は、学士の学位を有し、幼稚園教諭一種免許状を取得していることを原則とする。

（授業科目及び所要の単位）

第４条　教職課程は、教科に関する科目、教職に関する科目に区分し、別表の授業科目の中から所要の単位を修得するものとする。

（履修登録）

第５条　教職課程の授業科目を履修しようとする者は、所定の期間において履修登録を完了しなければならない。

（成績評価及び単位の認定）

第６条　教職課程の授業科目に係る成績評価及び単位の認定については、学則第 39 条及び第 40 条を準用する。

（科目等履修生）

第７条　学則第 48 条により、教職課程の授業科目の履修を希望する者があるときは、教授会の議を経て、学長が科目等履修生として履修を許可することができる。

（免許状の授与申請）

第８条　第３条第１項及び第４条の規定により、所要の単位を修得した者は、一括または本人により、都道府県教育委員会に免許状授与の申請ができるものとする。

附　則

この規程は、平成 27 年 4 月 1 日から施行する。

附　則

１　この規程は、平成31年4月1日から施行する。

２　第３条に規定する教育職員免許法及び同法施行規則及び第４条に規定する別表は、施行日の前日に在籍する学生には適用せず、なお従前の例による。

別表（第４条関係）

免許法行規則に定める科目区分	授業科目名	配当年次	単位数		備　考
			必　修	選　択	
領域及び保育内容の指導法に関する科目	子どもとアート論	1･2前		2	左記授業科目から24単位以上選択履修
	子どもとことば論	1･2後		2	
教育の基礎的理解に関する科目	教育的ケアリング特論	1･2後		2	
	学び学特論	1･2前		2	
	保育学特論	1･2前		2	
	子ども思想史特論	1･2前		2	
	保育実践研究	1･2後		2	
	保育者特論	1･2前		2	
	子ども・子育て支援実践研究	1･2後		2	
	家族社会学特論	1･2後		2	
	子ども政策特論	1･2後		2	
	教育学特殊研究	1･2後		2	
	子ども環境学特論	1･2前		2	
	発達心理学特論	1･2前		2	
	保育・教育課程研究	1･2後		2	

科 目 名	子どもとアート論		副題		
担 当 者	安村　清美・斉木　美紀子（オムニバス・一部共同）				
開 講 期	前期	単位数	２単位	配当年次	１・２年次
授業の概要	子どもの育ちを見通した時、アートに潜む創造的経験のプロセスに、実践的学びとしての意味を見出すことができる。人間としての子ども期のアート経験が、その育ちにもたらす意味、特に保育現場におけるすべての子どものためのアート教育の可能性について、個別のアートの独自性及びトータルな識見をもてるよう、理論と実践を往還しながら研究する。 安村担当の講義では、舞踊家と教育現場の関わりと実践を通して、アートとして舞踊がもつ教育的意味について考察する。また、表現する身体について、身体を通して表現し人と共振することとは何か、その意味について芸術教育に関わる文献と事例を合わせて探究する。 斉木担当の講義では、音楽表現の視座から子どもの表現を捉え、表現する主体としての自分についても探求しながら、アート教育についての理解を深めていく。 その上で、担当者共同による講義では、子どもがアートに出合い経験することの意味について、上記の内容から個々の学生の学びを基にプレゼンテーション及びディスカッションを行う。				
授業のねらい・到達目標	１．幼児期の子どもにとって、アートと出合い経験することがもたらす意味について、実践記録や研究を通して多様な視点から考察できるようになる。 ２．幼児期のアート経験の特徴として、その総合性に着目し、保育者としての総合的なプランニング力、実践力を修得する。				

授業の方法・授業計画	
1	「子どもとアート」について（人間としての子ども期のアート経験の意味）（安村・斉木）
2	教育現場とアーティストの関わり①―子どもの育ちに関わる意味と可能性について(安村)
3	教育現場とアーティストの関わり②―共振する身体：子どもの身体表現とコミュニケーション(安村)
4	表現する身体：保育現場における子どもの身体とアート―実践記録を読む(安村)
5	表現する身体：表現とプロセス、作品―実践記録、論文を読む(安村)
6	創造的芸術経験のプロセスにおける実践的学びとしての意味①ディスカッション
7	創造的芸術経験のプロセスにおける実践的学びとしての意味②実践・事例報告
8	子どもの音楽表現の芽生えと学び（斉木）
9	子どもと音環境（斉木）
10	子どもとうた（斉木）
11	子どもと楽器①民族楽器にふれる(斉木)
12	子どもと楽器②楽器と関わる子ども（斉木）
13	文化と子ども（斉木）
14	課題のディスカッション・プレゼンテーション（安村・斉木）
15	課題のプレゼンテーション、まとめと講評（安村・斉木）
期末	

授業に関する連　絡	本授業では内容に応じ講義形式、演習形式で授業を行う。実践を含む演習では、履修生に実践課題を課することがある。
評価方法及び評価基準	授業内での発言（20%）、プレゼンテーション（40%）、レポート（40%）などを基に総合的に判断する。
事前・事後学習の内容	事前学習として、自分自身が経験し、また保育現場で出合ったアート教育の課題を考える。さまざまなアートに親しみ、関心をもつ。事後学習として、各回の学習内容をまとめ、次回授業の課題準備につなげる。
履修上の注意	実践を含む授業なので、指示に留意し、実践に適した服装で授業に臨むこと。
テキスト	特になし
参考文献	『松本千代栄撰集２人間発達と表現』舞踊文化と教育研究の会（編者代表：安村清美）編、2007、明治図書 『保育の中のアート』磯部、福田、2015、小学館 『子どもたちの創造力を育む―アート教育の思想と実践』佐藤、今井編、2003東京大学出版会 『表現者として育つ』佐伯、藤田、佐藤編、1995、東京大学出版会 『音楽を学ぶということ』今川、2016、教育芸術社

科 目 名	子どもとことば論		副題	多文化共生時代の子どもとことば	
担 当 者	内藤　知美				
開 講 期	後期	単位数	２単位	配当年次	１・２年次
授業の概要	子どもの総合的発達におけることばの問題について、0歳から就学前までの時期の子どものことばの発達過程とことばの獲得に関わる社会・文化環境について理解を深める。家庭、幼稚園、保育所などの生活における子どものことばに関わる多様な事例を通して、子どもの生活や遊びと大人―子ども関係、子ども同士の関係がことばの発達にどのように相互に影響するのか、関係論的視点から検討する。また子どもを取り巻く社会・文化環境の変化、例えば乳幼児期からの視聴覚メディアの受容、日本語を母語としない子どもの増加、言葉の関わりのもちにくい子どもの問題など、子どもとことばを取り巻く今日的課題を捉える視点をもつことが目標である。また児童文化財を含めた「モノ」を有効に活用し、実際の保育において子どものことばを育てる保育者としての実践力を探究する。				
授業のねらい・到達目標	１．子どもが多様なかかわりの中でことばを獲得していく過程について理解を深める。特に子どもが主体的にことばを使用することの意味を問う。 ２．ことばをめぐる最新の理論に触れると同時に、具体的な事例を通して、現代社会に生きる子どものことばの発達を捉え、支援する具体的、実践的方法を学ぶ。				

授業の方法・授業計画	
1	子どもとことばの関係性
2	子どもとことばをめぐる社会環境・文化環境
3	ことばの発達と保育（0歳期）
4	ことばの発達と保育（１語発話の時期）
5	ことばの発達と保育（２語発話の時期）
6	ことばの発達と保育（２歳期・３歳期）
7	ことばの発達と保育（４歳期・5歳期）
8	ことばでの関わりのもちにくい子どもの援助①－多文化・多言語と子ども
9	ことばでの関わりのもちにくい子どもの援助②－ことばとコミュニケーション（ビデオカンファレンスを通して）
10	事例検討：同調、リズムとことば
11	事例検討：共感性とことば
12	事例検討：創造性や思考とことば
13	ことばを育てる児童文化財の活用①－絵本などの文化財が育むことば
14	ことばを育てる児童文化財の活用②－文化財を用いたことばの育ちあい
15	子どものことばと視聴覚メディア
期末	

授業に関する連　絡	個別のメール及び、でんでんばんを通して連絡をする。
評価方法及び評価基準	小論文（レポート）７０％、児童文化財の実践　３０％
事前・事後学習の内容	子どもとことばの発達をめぐる最新の理論、研究を随時紹介するので、関連する資料を熟読すること
履修上の注意	保育事例検討では受講生が自ら考え、積極的に発言することを望む。また「子ども」や「ことば」に関する関連文献を読み、学びを深めることを期待する。
テキスト	今井むつみ『ことばの発達の謎を解く』ちくまプリマ―新書, 2013年、幼稚園教育要領（平成29年告示）、保育所保育指針（平成29年告示）、幼保連携型認定こども園教育・保育要領(平成29年告示)
参考文献	岡本夏木『子どもとことば』（岩波新書1982）、麻生武『身ぶりからことばへ』（新曜社1992）青木保『異文化理解』（岩波新書2001）、佐伯胖『共感』（ミネルヴァ書房2007)、今井むつみ『ことばと思考』（岩波新書2010）など授業中に適宜指示する。

科 目 名	教育的ケアリング特論		副題		
担 当 者	生田久美子				
開 講 期	後期	単位数	２単位	配当年次	１・２年次
授業の概要	本講義では、教育の文脈における「ケアリング」の概念を議論することの意義を考察し、それが「人間の学びとは何か」「人間の教えるとは何か」という問題に新たな視点を提供することについて考える。 上記の目的のために、学校における「ケアリング」の重要性について論じているジェーン・ローランド・マーチン著『スクールホーム―＜ケア＞する学校』、またネル・ノディングズの『ケアリング』を輪読する。				
授業のねらい・到達目標	１．教育における「ケアリング」概念を理解する。 ２．学校教育における具体的な「ケアリング」の実践例を分析する。 ３．教育における「ケアリング」の意義を理解した上で、新たな教育像および教員像を構築する。				

授業の方法・授業計画	
1	教育における「ケアリング」とは何か
2	学校教育における「ケアリング」の実践事例を考える
3	『スクールホーム』の輪読(1)家庭と学校
4	『スクールホーム』の輪読(2)文化とカリキュラム
5	『スクールホーム』の輪読(3)生きることへの学び
6	『スクールホーム』の輪読(4)抑圧された家庭生活
7	『スクールホーム』の輪読(5)家庭と世界
8	『スクールホーム』の総括
9	『ケアリング』の輪読(1)なぜケアリングにかかわるのか
10	『ケアリング』の輪読(2)ケアするひと
11	『ケアリング』の輪読(3)ケアされるひと
12	『ケアリング』の輪読(4)ケアリングの倫理
13	『ケアリング』の総括
14	「ケアリング」論から考える教育像・教員像
15	まとめ
期末	試験なし

授業に関する補足説明（課題に対するフィードバック、履修上のルール等）	本授業では、学術書を履修生全員で読み込み、各回担当の履修生がレジュメ作成を担当し、発表することを課する。その際、概念、理論などを理解した上で、レジュメ作成および発表をすること。
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（25%）・発表等（25%）・最終レポート（50%）を基にして評価する。
事前・事後学習の内容	予定されている内容に該当する教科書の章を事前に読んでおくこと。 授業の内容を必ず復習すること。
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。
テキスト	J.R.マーティン　生田久美子監訳『スクールホーム―＜ケア＞する学校』、東京大学出版会、2007年 N.ノディングス　立山善康他訳『ケアリング　倫理と道徳の教育－女性の観点から』、晃洋書房、1997年
参考文献	N.ノディングス　山崎洋子・菱刈晃夫訳『幸せのための教育』、知泉書館、2008年 N.ノディングス　佐藤学訳『学校におけるケアの挑戦―もう一つの教育を求めて』、ゆみる出版、2007年 佐伯胖編著『「子どもがケアする世界」をケアする:保育における「二人称的アプローチ」入門』、ミネルヴァ書房 、2017年

科 目 名	学び学特論	副題	
担 当 者	佐伯　胖		
開 講 期	前期　単位数　２単位　配当年次　１・２年次		
授業の概要	いわゆる「学習」（動物を含めた生物の行動形成）についての心理学、すなわち学習心理学は、20世紀後半から数度にわたって大きな変革を経てきた。とくに、人間の学習は、過去の学習心理学と決別し、人間学の一領域として新しく生まれ変わり、発展してきている。そのきっかけを作った理論は、「正統的周辺参加論」とよばれている。講義では、この理論をさらに人間学的観点から発展させた「学び学」を提唱する。		
授業のねらい・到達目標	「学習」についての科学的研究は、長い間、行動主義心理学の考え方に支配されていたが、それへの根源的批判から、認知心理学、状況論を経て正統的周辺参加論に至っている。講義では、それらの経緯をたどり、人間学的観点からの「学び学」の考え方を習得することを目標とする。		

授業の方法・授業計画

1	「勉強」と「学び」
2	メタ理論―理論のタテ糸・ヨコ糸・ナナメ糸
3	行動主義とは何か
4	認知革命とは何か
5	人工知能と学習科学
6	認知的徒弟制論
7	「ダイエット算数」とは何か
8	状況論革命
9	正統的周辺参加論
10	「学校化」のおそろしさ
11	「学ぶ」ということの意味
12	考えることの教育
13	「わかる」ということの意味
14	「わかり方」の探求（１）
15	「わかり方」の探求（２）
期末	

授業に関する連　絡	毎回、最後の10分で授業についての質問、コメントを「リアクション・ペーパー」に書いて提出する。11～15回は当該書籍の1章を読んで、感想を出し合い討議する。
評価方法及び評価基準	講義の区切れ目で、レポートを提出する（50%）。講義の最後には講義全体を振り返ってのレポートを提出する（50%）。それらを基に総合的に評価する。
事前・事後学習の内容	講義の展開過程で逐次、参考文献を紹介するので、できるかぎりそれらを事前に読むことが求められる。
履修上の注意	全講義に出席のこと
テキスト	J. レイヴ&E. ウェンガー著佐伯　胖訳『状況に埋め込まれた学習―正統的周辺参加―』産業図書、1993年
参考文献	佐伯　胖著『「学び」の構造』東洋館、1975年 佐伯　胖著『イメージ化による知識と学習』東洋館、1978年 佐伯胖ほか著『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房、2013年

科 目 名	保育学特論		副題		
担 当 者	内藤　知美				
開 講 期	前期	単位数	２単位	配当年次	１・２年次
授業の概要	子どもは多様な関係性の中で学び、育つ存在である。また保育という営みは、子どもだけではなくそこに関わる保護者や保育者、そして地域、社会の学び、育ちと深く関わる。社会文化的視点から、多様で複雑な状況や文脈において生成される人間の「学び」や「育ち」を捉えるための視座を得るとともに、子どもが今を生きる「保育フィールド」の力動性や構造を読み解く方法について検討する。現在、「子ども人間学」と通底する観点から、保育を構築しようとする動きが生まれている。ニュージーランドの「テファリキ」を始めとする海外の保育の動向を捉えながら、多様で複雑な歴史、文化、社会が織り成すダイナミズムの中で、子どもが学びに向かう力や人間性を育むプロセスとそこに関わる人々（保育者、保護者等）のあり様を探究する。				
授業のねらい・到達目標	１．子どもの「学び」や「育ち」を捉えるまなざしを問い直し、子どもが今を生きる場（保育フィールド）の構造や力動性を捉えるための視点を学ぶ。また保育フィールドで生成する多様で多層なことがらについての具体的な事例を検討することで、それらが子どもの学びや育ちにいかに関わるのか、その「意味」を解釈する様々な視点を学ぶ。 ２．海外の保育の動向から、子どもを起点に、保育にかかわる多様な人々が学び、変容するプロセスを捉える。そのことを通じて、保育が有する豊かな資源と新たな社会のあり方を構想する可能性を探る。				

授業の方法・授業計画	
1	保育のまなざし－教える、教えられる－
2	子どもか子どもたちかという「問い」
3	子どもの学びと育ちを捉える（１）発達と育ち
4	子どもの学びと育ちを捉える（２）社会文化的アプローチ
5	保育フィールドの構造と理解
6	遊びを通した保育（１）事例検討：身体的であること
7	遊びを通した保育（２）事例検討：共同的、協働的であること
8	子どもに対する気づき（１）事例検討：なぜ気づくのか
9	子どもに対する気づき（２）事例検討：枠組みの再構築
10	保育における対話と同僚性
11	保育実践と構造（１）：ＮＺのテファリキの原理
12	保育実践と構造（２）：ＮＺの学びの物語と評価
13	多様な「学び」の可能性が埋め込まれた保育の営み（１）：学びあい
14	多様な「学び」の可能性が埋め込まれた保育の営み（２）：世代間循環
15	まとめ：保育の課題と展望
期末	

授業に関する連　絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習では、文献講読および実践事例を基にした討議のためのレジュメを担当者は作成すること。
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議及びレジュメ作成（50%）、期末課題等（50%）を基に総合的に評価する。
事前・事後学習の内容	授業中に適宜参考文献を紹介する。事前学習としては、参考文献を読んで授業へ臨むこと。また、事後学習としては、授業の内容を振り返り、さらに関連・関心のある参考文献を読み込み、自分の考えを整理すること。
履修上の注意	各自のテーマ・関心から授業内の議論に積極的に参加すること。
テキスト	鯨岡峻『保育主体として育てる営み』ミネルヴァ書房, 2010年 佐伯胖編『共感―育ち合う保育のなかで―』ミネルヴァ書房, 2007年
参考文献	J.ﾚｲｳﾞ&E.ｳｪﾝｶﾞｰ著, 佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習―正統的周辺参加―』産業図書, 1993年 日本保育学会編『保育学講座Ⅰ保育学とは―問いと成り立ち』東京大学出版会, 2016年

科 目 名	子ども思想史特論		副題		
担 当 者	石橋　哲成				
開 講 期	前期	単位数	２単位	配当年次	1・２年次
授業の概要	「子ども」という存在は、教育思想史の中でどのように捉えられていたのであろうか。本講では、ヨーロッパ中世における子ども観を最初に取り上げ、その後ルネッサンス期を経て、近世において子どもがどのように捉え直されるようになったのかを見ていく。今日の子ども観の先駆けとなったのは、ルソーであった。ルソーが「子どもの発見者」と言われる所以である。その後ルソーの影響を強く受けた、ペスタロッチー、さらに「幼稚園」の創立者となったフレーベルや「子どもの家」を創立したモンテッソーリが現れた。それぞれがどのような境遇の中で、どのような子ども観を獲得していったのかを考察する。				
授業のねらい・到達目標	１．ヨーロッパ中世の子ども観はどのようなものであり、それに対して、ルソー、ペスタロッチー、フレーベル、モンテッソーリは、どのような子ども観を獲得していったのかを理解する。 ２．その理解の上に立って、受講者各自も自らの子ども観を確固たるものにしていくこと。				

授業の方法・授業計画	
1	イントロダクション　―　子ども思想史を学ぶ意味
2	ヨーロッパ中世における人間観・子ども観
3	ルネッサンス期における人間観・子ども観
4	近世における子ども観の概観
5	ルソーにおける子ども観の成立過程
6	ルソーにおける子ども観と教育観
7	ペスタロッチーにおける子ども観の成立過程
8	ペスタロッチーにおける子ども観と教育観
9	フレーベルにおける子ども観の成立過程
10	フレーベルにおける子ども観と教育観
11	モンテッソーリにおける子ども観と教育観
12	西洋の新教育運動における子ども観と教育観
13	シュタイナーにおける子ども観と教育観
14	ランゲフェルトにおける「子ども人間学」
15	受講生による研究発表：子ども思想史と幼児教育
期末	

授業に関する連　絡	授業は原則として講義形式で行うが、途中で演習形式でも行う。
評価方法及び評価基準	授業内で提出する数回の小レポート（50%）及び研究発表（50%）を基にして評価する。
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。
履修上の注意	授業内の議論に対する積極的な参加を求める。
テキスト	事前に授業資料を配布する。
参考文献	ルソー著/今野一雄訳『エミール（上）』/岩波書店/2012（第８０刷） ペスタロッチー著/前原・石橋共訳『ゲルトルート教育法・シュタンツ便り』/玉川大学出版部 フレーベル著/小原國芳訳『人の教育』（『フレーベル全集第２巻』）/玉川大学出版部

科 目 名	保育実践研究		副題		
担 当 者	髙嶋　景子				
開 講 期	後期	単位数	２単位	配当年次	１・２年次
授業の概要	「保育」という営みを探究していくためには、その実践的課題を、個々の保育者や子どもの持つ「能力」や「技術」の問題としてではなく、その「実践」に関わる多様な他者やモノ、環境等との関係の中で多層的に捉える視座が必要となる。そのように多層的に保育の営みを捉えながら、「子ども人間学」的観点に立って、自らの実践を省察していくまなざしを獲得していくため、本授業では、一人一人の受講者が実践的な場におけるフィールドでの観察や自らの実践を通して得た事例を基に、そこから見出される課題を共有し、「質の高い実践」とは何か、その在り方や構造について検討し、探究していく。				
授業のねらい・到達目標	保育という営みにおける具体的な事例のなかから、そこで問われるべき実践的課題を抽出し（「問い」を見出し）、それらを周囲の多様な他者やモノ、環境等との関係の中で適切に「問う」ことのできる視座を獲得していくと同時に、その視座を基に、子どもの育ちやその育ちを支える保育の在りようについて探究していくことを目的とする。				

授業の方法・授業計画	
1	ガイダンス
2	「子どもをみる」ということ①～子どもをみるまなざしを規定する子ども観・発達観／自らの枠組みへの気づき～
3	「子どもをみる」ということ②～「子どもを共感的にみる」ということの意味～
4	「子どもをみる」ということ③～「子どもの育ちをみる」ということ／共感的理解を妨げるもの～
5	実践事例研究Ⅰ①～各自の事例報告と討議：子どもを取り巻く関係構造への着目～
6	実践事例研究Ⅰ②～各自の事例報告と討議：「気になる子」を生み出す関係構造～
7	実践事例研究Ⅰ③～各自の事例報告と討議：子どもの「遊び」と仲間集団～
8	実践事例研究Ⅰ④～各自の事例報告と討議：「遊び」を支える活動媒体としての「モノ」への着目～
9	保育という営みを問い直す①～「ある」から「なる」を支える保育とは～
10	保育という営みを問い直す②～「子どものケアする世界をケアする」ということの意味～
11	実践事例研究Ⅱ①～各自の事例報告と討議：子どもを取り巻く実践共同体への着目～
12	実践事例研究Ⅱ②～各自の事例報告と討議：保育の場における実践共同体の持つ多層性～
13	実践事例研究Ⅱ③～各自の事例報告と討議：実践共同体の「境界」とその柔軟性の持つ意味～
14	実践事例研究Ⅱ④～各自の事例報告と討議：子どもの育ちを支える保育者のまなざしと援助～
15	まとめ
期末	

授業に関する連　絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習においては、受講者全員が、自らの観察事例もしくは実践事例と、その事例に対する考察の発表を行い、それらに対する討議を中心に授業を展開していく。
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議（50%）、期末課題等（50%）を基に総合的に評価する。
事前・事後学習の内容	授業において、実践的な場におけるフィールドでの観察、もしくは、自らの実践を通して得た事例、および、その事例に対する考察の発表を行うため、それらの事例の収集と検討を行っておくこと。また、授業後は、授業時の他の事例の発表や討議の振り返りを十分に行い、自分なりの考察を深めていくこと。
履修上の注意	実践事例の収集のために保育現場での観察等が必要となる場合は、対象園の選定や依頼については、事前に授業担当教員へ相談すること。
テキスト	岸井慶子著『見えてくる子どもの世界―ビデオ記録を通して保育の魅力を探る―』ミネルヴァ書房, 2013年 柴山真琴著『子どもエスノグラフィー入門―技法の基礎から活用まで―』新曜社, 2006年
参考文献	子どもと保育総合研究所編佐伯胖他著『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房, 2013年 鯨岡峻・鯨岡和子著『保育のためのエピソード記述入門』ミネルヴァ書房, 2007年 大宮勇雄著『学びの物語の保育実践』ひとなる書房, 2010年 河邉貴子著『保育記録の機能と役割―保育構想につながる「保育マップ型記録」の提言―』聖公会出版, 2013年

科 目 名	保育者特論		副題		
担 当 者	髙嶋　景子				
開 講 期	前期	単位数	２単位	配当年次	１・２年次
授業の概要	子どもが主体となって自ら学ぶプロセスをして展開される保育においては、常に、予想外の出来事が生起し、刻々と状況が複雑に変化していく。保育者は、そのような複雑な状況と対話しつつ、眼前の子どもの思いや課題を丁寧に探り、その育ちを支える関わりや活動の在りようを検討し、実践していくことが求められる。そうした保育者の専門性は、D.ショーンの指摘するように、体系的な知識や法則を適用して問題を解決するような「技術的合理性」によって成り立っているものではなく、「反省的実践家」として、その在りようを読み解いていく必要があると考えられる。本講義では、そうした保育者の専門性について探究するため、まずは、「保育」という営みや、そこでの子どもの学びや育ちを理解するための視座を検討し、それを踏まえて、保育者の専門性と、その専門性の深まりを支える「省察」のプロセスと周囲の関係構造について考察していくこととする。				
授業のねらい・到達目標	１．子どもの「学び」や「育ち」を捉えるための保育者のまなざしの在りようを探ると同時に、それらの「学び」や「育ち」を支える保育実践の構造と、それを実践する保育者の専門性を読み解くための様々な視点を学ぶ。 ２．保育者の専門性が深まっていく過程と、その過程を支える周囲の関係構造について探究していくための問いの持ち方、考え方を獲得する。				

授業の方法・授業計画	
1	ガイダンス
2	保育者の専門性に関する研究の動向（１）～歴史的変遷を辿る～
3	保育者の専門性に関する研究の動向（２）～OECD報告等における研究動向～
4	「保育」という営みを読み解く多様なアプローチ（１）～個体能力論から関係論的アプローチへの転換～
5	「保育」という営みを読み解く多様なアプローチ（２）～保育者を取り巻く多様な関係構造への着目～
6	「保育」という営みを読み解く多様なアプローチ（３）～正統的周辺参加論とは～
7	「保育者になるということ」（１）～「子どもの声を聴く」とは～
8	「保育者になるということ」（２）～子どもがケアする世界をケアするために：鑑識眼的なまなざし～
9	「保育者になるということ」（３）～子どもがケアする世界をケアするために：保育における即興性～
10	「保育者になるということ」（４）～子どもと保育者の相互主体性～
	保育者の学びを支える多様な対話（１）～省察的実践家としての保育者の専門性～
12	保育者の学びを支える多様な対話（２）～事例を通して読み解く「省察」の生成過程～
13	保育者の学びを支える多様な対話（３）～「省察」を引き出す保育カンファレンスの意義と役割～
14	保育者の学びを支える多様な対話（４）～対話のもつ「多声性」への着目～
15	まとめ
期末	

授業に関する連　絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習では、文献購読及び実践事例を基にした討議を行うためのレジュメの作成の担当を課す。
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議及びレジュメ作成（50%）、期末課題等（50%）を基に総合的に評価する。
事前・事後学習の内容	授業の展開過程で適宜参考文献を紹介するため、できるかぎりそれらを事前に読んで授業へ臨むこと。また、授業後は振り返りを十分にして自分の考えを整理すること。
履修上の注意	各自のテーマや関心領域に対し探究心を持って、授業内の議論にも積極的に参加すること。
テキスト	佐伯胖編著『「子どもがケアする世界」をケアするということ』ミネルヴァ書房,2017
参考文献	子どもと保育総合研究所編佐伯胖他著『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房,2013 倉橋惣三著『幼稚園真諦』フレーベル館,1998

科 目 名	子ども・子育て支援実践研究		副題		
担 当 者	犬塚　典子				
開 講 期	後期	単位数	2単位	配当年次	1・2年次
授業の概要	子ども・子育て支援の実践について，前半は，OECD諸国の動向について把握し，カナダの事例を分析する。後半は，日本の新聞、自治体広報など各種メディアの記事を共同で分析し，子育て支援実践のための理論，政策，財政のありかたについて検討する。				
授業のねらい・到達目標	１．日本の子ども・子育て支援施策の変遷および現状について理解する。 ２．海外における施策や実践との比較から，日本の子ども・子育て支援制度の内容について理論的・実証的に分析する視点を身につける。 ３．現代社会の子ども・子育て環境やその実際について研究的な問題意識をもつようになる。				

授業の方法・授業計画	
1	オリエンテーション（ガイダンスおよび課題研究について）
2	OECD諸国における子どものケアと教育に関する施策の動向（１）
3	OECD諸国における子どものケアと教育に関する施策の動向（２）
4	OECD諸国における子どものケアと教育に関する施策の動向（３）
5	カナダにおける子どものケアと教育に関する実践事例検討（１）全日制幼稚園
6	カナダにおける子どものケアと教育に関する実践事例検討（２）学童保育
7	カナダにおける子どものケアと教育に関する実践事例検討（３）父親休業
8	日本の子ども・子育て支援政策の変遷ならびに現状
9	日本における子どものケアと教育に関する実践事例検討（１）幼稚園・保育所
10	日本における子どものケアと教育に関する実践事例検討（２）認定こども園
11	日本における子どものケアと教育に関する実践事例検討（３）事業所内保育施設
12	日本における子どものケアと教育に関する実践事例検討（４）病児・病後児保育
13	日本の政策事例に対する討議（１）
14	日本の政策事例に対する討議（２）
15	まとめ
期末	

授業に関する連　絡	でんでんばんを通して連絡する。
評価方法及び評価基準	毎回の討議への貢献度を総合して評価する。
事前・事後学習の内容	国内の政策や実践例について情報収集および整理を常に行うこと。また，毎回の授業内容を参照しつつ各自の課題研究を進めること。
履修上の注意	課題発表のために授業時間外での研究調査を必要とする。
テキスト	配布資料を中心に進める。
参考文献	OECD『OECD保育白書』明石書店，2011年.

科 目 名	家族社会学特論		副題		
担 当 者	小玉　亮子				
開 講 期	後期	単位数	２単位	配当年次	１・２年次
授業の概要	アリエスの研究を嚆矢として家族が歴史的構築物であることが認識されるようになり、それまでの家族を本質から語るような議論ではなく、家族を社会的構築物としてみなす、いわゆる家族社会学のパラダイム転換が起こった。そして、そこから近代以降子どもに対する家族と学校の影響力は歴史的に未だかつてないほど強力なものとなったことがあきらかにされてきた。しかし、近代以降の家族と学校はいつでも期待される機能を十全に果たし得るとは限らない、家族と学校はそれぞれ課題に直面し、両者の関係は、複雑に問題を抱えることとなった。こういった家族と学校の複雑な関係に焦点を当てて、家族の問題について社会学的に分析する。				
授業のねらい・到達目標	社会的な家族認識を学び、家族をマクロな視点及びミクロな視点から分析することによって、自らが無意識のうちにもつ家族観が普遍のものではないことを学び、自らの家族観を相対化することを試みる。同時に、家族について学校や地域との関係に焦点を当てて、家族が単独のシステムとしてあるのではなく、様々なシステムと相互的に存在していることを理解する。				

授業の方法・授業計画	
1	イントロダクション ― 家族社会学のパラダイム転換を受けて
2	近代家族とは何か
3	家族の危機と年齢段階
4	家族と学校・地域との関係
5	連携とパートナーシップ
6	社会変動と教育改革
7	新らしい能力観と子育て
8	家族の課題を考える
9	家族の不安
10	家族の期待
11	家族と参加
12	教師からみた家族（1）
13	教師からみた家族（2）
14	ジェンダーと家族
15	これからの家族の課題を考える
期末	

授業に関する連　絡	社会における家族イメージを知るために、メディアによる家族に関する報道などに注意しておくことは授業を受ける上で有益となる。
評価方法及び評価基準	授業への参加及び、小レポートと研究発表を元に総合的に評価する。
事前・事後学習の内容	事前に授業前の課題を伝えるので、その課題に取り組むこと。 授業後には、各自の問題意識に沿ったまとめを行うこと。
履修上の注意	各自のテーマや関心領域に対し探求心を持って授業に参加すること。
テキスト	小玉亮子編『接続期の家族・園・学校』東洋館出版社
参考文献	藤崎宏子・池岡義孝編『現代日本の家族社会学を問う』ミネルヴァ書房 アリエス（1980）『子どもの誕生』みすず書房

科 目 名	子ども政策特論		副題		
担 当 者	渡邉　英則				
開 講 期	後期	単位数	２単位	配当年次	１・２年次
授業の概要	平成２７年度から国の子どもや子育てに関する制度が大きく変わった。これまで縦割り行政で分かれていた幼稚園と保育所を、幼保連携型認定こども園という一つの制度としていく動きもこの制度改革の大きな柱になっている。また平成３０年度からの学習指導要領改訂の動きは、小中学校の学習指導要領の改訂だけでなく、幼稚園や保育所、認定こども園も含め、日本の教育のあり方を大きく変えようとする改訂になっている。少子化対策や待機児童対策、地方分権、子育て支援の充実など、教育・保育施策全体を、国や地方が地域の実態に合わせたものにしていこうとする動きも活発である。このような社会の動きや制度改革を見据えながら、実践する側の立場から、ではどのように園やクラスを経営し、どのように教育や保育を行っていけばいいかを探求していくことにする。				
授業のねらい・到達目標	１．制度が大きく変わるときに問われるのは理念である。新たにできる制度は子どもを本当に大事にする社会を実現しようとする制度となっているのか、園や保育者はどんな子どもを育てようとしていて、その営みを支える制度となっているのか等について、保育の実態も踏まえながら様々な視点から検討ができる力を養う。 ２．理念を具体的な実践として実現していく方法や考え方を獲得していく。				

授業の方法・授業計画

1	ガイダンス
2	ＯＥＣＤの調査・提言について～世界の乳幼児教育の流れを中心に～
3	子ども・子育て支援新制度について　～新たな制度がめざす方向とは～
4	学習指導要領の改訂について
5	幼稚園制度の基本的な考え方と課題
6	保育園制度の基本的な考え方と課題
7	認定こども園制度について（１）～制度と仕組み～
8	認定こども園制度について（２）～実際の保育を中心に～
9	認定こども園制度について（３）～認定こども園保育要領を読み解く～
10	子育て支援について
11	幼保小連携について
12	特別支援教育について
13	海外の保育制度について
14	実践を深めていくために必要な視点とは何か
15	まとめ
期末	

授業に関する連　絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習では履修生にレジュメの作成の担当を課す。
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議（50%）、期末課題（50%）を基に総合的に評価する。
事前・事後学習の内容	授業の展開過程で適宜参考文献を紹介するため、できるかぎりそれらを事前に読んで授業へ臨むこと。また、授業後は振り返りを十分にして自分の考えを整理すること。
履修上の注意	各自のテーマや関心領域に対し探求心を持って、授業内の議論にも積極的に参加すること。
テキスト	『保育白書2015』ひとなる書房、全国保育団体連絡会・保育研究所編(※その年度の最新のものを使用する) OECD保育白書―人生の始まりこそ力強く：乳幼児期の教育とケア(ECEC)の国際比較　明石書店 2011年
参考文献	佐伯胖ほか著『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房、２０１３年 マーガレット・カー著、大宮勇雄・鈴木佐喜子訳『子どもの学びをアセスメントする』ひとなる書房、２０１３年

科 目 名	教育学特殊研究		副題		
担 当 者	石橋　哲成・吉國　陽一　（オムニバス）				
開 講 期	後期	単位数	２単位	配当年次	１・２年次
授業の概要	本年度の「教育学特殊研究」においては、ドイツとロシアの２つの国の教育学・心理学の文献を読むことによって、教育学的視野を広げることを目指したい。授業の前半においては、ドイツの教育学者、ボルノーの『教育を支えるもの―教育関係の人間学的考察―』（原題は"Die paedagogische Atmosphaere"）を読み進める。教育がうまくいくかどうかの鍵は、子どもと教育者の間の教育的関係がうまくいくかにかかっていると言っても過言ではない。教育的関係をボルノーに従って、子どもと教育者の両方から考察していく。 授業後半においては革命期におけるロシアの心理学者、レフ・ヴィゴツキーの心理学を文献購読を通じて学ぶ。ヴィゴツキーの心理学においては子どもの学習と発達を社会的関係を通して獲得される文化を中心軸として理解する。また、事物を運動の過程において理解する弁証法的な視点から、子どもは他者と文化との接点において常に「発達しつつある存在」として理解される。ヴィゴツキーの心理学を学ぶことを通して、子どもを理解する新たな視座を獲得することを目指す。				
授業のねらい・到達目標	１．ボルノーは「子どもの被包感」についてどのように捉えているのかを理解する。 ２．教育的関係を良好なものにするために、教育者に必要なものは何かを吟味する。 ３．ヴィゴツキーの心理学に触れることを通して、他者と文化との接点において常に「発達しつつある存在」として子どもを理解する視点を手に入れる。 ４．ヴィゴツキーの心理学の観点から教授-学習や子どもの遊びといった事象を理解する。				

1	ボルノーの教育的思索の概要
2	子どもの被包感の大切さ
3	子どもの気持ち（快活・朝のよう感情・期待の喜ばしさ）
4	子どもの徳性（感謝・従順・愛・尊敬）
5	教育者の子どもへの信頼
6	教育者の徳性（教育愛・期待・忍耐・希望）
7	円熟した教育者の基本的態度（清明・ユーモア・善意）
8	ヴィゴツキー心理学の概要
9	ヴィゴツキーの文化-歴史的心理学①-人間を人間たらしめるもの-
10	ヴィゴツキーの文化-歴史的心理学②-ヴィゴツキーの研究方法-
11	ヴィゴツキーの文化-歴史的心理学③-高次精神機能とその社会的起源-
12	ヴィゴツキーの文化-歴史的心理学④-高次精神機能の発達の観点から見た書き言葉の前史-
13	ヴィゴツキーの障害児教育論
14	ヴィゴツキーの遊び論
15	まとめ
期末	

授業に関する連　絡	本授業は演習形式で行う。演習では、履修生にレジュメ作成の担当を課する。
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）及び発表（50%）を基に評価する。
事前・事後学習の内容	予習をしてから授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。
テキスト	ボルノウ著、森・岡田共訳『教育を支えるもの―教育関係の人間学的考察―』／黎明書房／1971 ヴィゴツキー，L.S.（柴田義松 訳）『文化的-歴史的精神発達の理論』　学文社　2005年 柴田義松『ヴィゴツキー入門』，寺子屋新書，2006年
参考文献	ボルノー著、石橋哲成訳『思索と生涯を語る』／玉川大学出版部／1991

科 目 名	子ども環境学特論		副題		
担 当 者	仙田 考				
開 講 期	前期	単位数	２単位	配当年次	１・２年次
授業の概要	現在の幼稚園教育の基本理念である「環境を通しての保育」の意義と在り方、またその実践について学ぶために、子どもと環境との関係、特に子どもと環境との相互関係に着目し、その発達過程と育成に必要な環境のあり方を論ずる。その際、今日の子どもたちを取り巻く環境の激変が、未来を担う子どもたちに与える影響を考察し、その課題を整理した上で、子どもの豊かな発達を支える保育環境や子どもに活力を与える社会環境の構築に必要な要素を検討する。子どもの視点から見た環境の捉え直しを横断的・学際的に検討する。また幼稚園等の保育現場を訪れ、保育の方法や実践について考える機会も持つ。 子ども環境学とは何かからはじめ、とくに子どもの遊び環境を中心的に取り上げながら、遊び空間の在り方、住まいの問題、安全な環境づくり、幼児教育施設、学校、医療環境、児童館・環境学習施設などの地域施設の現状などについて検討を進める。その上で、子どものための、子育てがしやすい街・都市づくりの在り方を展望し、子どもや子育て家庭を支える保育・教育実践のあり方を幅広い視点から考える。				
授業のねらい・到達目標	学生が、子どもがひと・もの・空間などさまざまな環境と関わる活動や子どもや子育てのための環境について、座学とともに、関連分野の専門家の話や、幼稚園等の保育現場の見学等を通して、子どもと環境との関係や、子どもの発達に寄与する環境のあり方を理解し、子どもや子育てにとってよりよい環境とはなにかを、学び考えることを目標とする。				

授業の方法・授業計画	
1	子ども環境学とは何か － 幼稚園教育における「環境を通しての保育」とは
2	子どものあそび環境 － 時間、空間、集団、方法～遊環構造、こども時代のあそび環境
3	子どものための安全環境 － あそび環境におけるリスクとハザード
4	子どもと保育環境（１） － 幼稚園、保育園、認定こども園の園舎環境
5	子どもと保育環境（２） － 幼稚園、保育園、認定こども園の園庭環境
6	子どもと住環境 － 子どもの住まいの環境
7	子どもと学校環境 － 小学校環境と幼保小連携の可能性
8	子どもの感性を育む環境 － 保育実践におけるアート、表現と環境
9	子どもと癒しの環境 － 自然等の癒し環境
10	子どもの地域施設環境 － 園外保育、子育て施設等の環境
11	子どもと環境学習 － 自然、環境への気づきから持続発展教育へ
12	子どものための都市・まちづくり － 子どもにやさしいまちの在り方に向けて
13	幼児教育施設等の視察（１） － 認定こども園：園舎、園庭
14	幼児教育施設等の視察（２） － 幼稚園：園舎
15	幼児教育施設等の視察（３） － 幼稚園：園庭遊具、ビオトープ
期末	

授業に関する連 絡	でんでんばんを通して連絡をする。
評価方法及び評価基準	各授業での発表（50%）及びレポート（50%）を総合的に判断し評価する。
事前・事後学習の内容	児童館や公園など子どもの施設に足を運んで、実際のこども施設がどのように作られ、使われている状況などを観察しながら、年齢や都市環境に応じどのようにあるべきかを考察してほしい。
履修上の注意	各自の問題意識に基づいて授業での討論や視察に積極的に参加すること。
テキスト	特に使用せず。
参考文献	仙田満『子どもとあそび』岩波新書，1992年／仙田満・藤塚光政『幼児のための環境デザイン』世界文化社，2003年／仙田満『環境デザインの方法』彰国社，1998年／仙田満『環境デザイン講義』彰国社，2006年／仙田満『こどもの庭』世界文化社，2015年

科 目 名	発達心理学特論		副題		
担 当 者	横尾　暁子				
開 講 期	前期	単位数	２単位	配当年次	１・２年次
授業の概要	人間の生涯にわたる発達・成長のなかで、人生初期はその基盤となる重要な時期であると考えられている。本授業では、主に乳幼児期・児童期の子どもの心理学的発達をテーマとして扱う。 授業では、国内及び海外における研究成果として論文を紹介する。受講者は論文を読み概要をまとめた上で自分の考察や問題意識とともに発表し、それに基づいて討議を行う。				
授業のねらい・到達目標	・発達心理学の最新の研究成果を学び、子どもの発達や子どもとの関わりについて深く思考し、子どもに対する多面的な理解を深める。 ・子どもの生涯の発達を見通し支えるために、発達心理学の研究成果を実践の場で応用する力を身につける。				

授業の方法・授業計画	
1	ガイダンス
2	心理学の研究法（実験、観察、調査、事例研究）
3	研究計画と心理統計
4	発達の基盤-遺伝と環境
5	愛着の発達
6	認知発達-表象の発達と概念の発達-
7	認知発達-言語発達と社会的認知の発達-
8	自己認知の発達
9	道徳性と向社会的行動の発達
10	問題解決行動の発達
11	仲間関係の発達
12	親子関係の発達-養育態度と発達-
13	食行動の発達
14	保育者と子どもの関係
15	振り返りとまとめ
期末	

授業に関する連　絡	本授業は内容に応じて、講義と演習の両形式で行う。 演習は、発表と討議を予定しており、履修生に資料作成の担当を課す。
評価方法及び評価基準	授業内での発表および討議（50%）、課題の提出（50%）に基づいて評価する。
事前・事後学習の内容	事前：各回の授業のテーマについて、関連する基礎的な知識を確認し、自分の考えをまとめておくこと。また、配布資料や指定の文献等はよく読んでおくこと。発表担当の場合は、資料を準備すること。 事後：各回の学習内容を整理して、学期末の課題作成の準備につなげること。各自の問いや疑問点についてはさらに調べるなどして、学びを自ら深めていくことが望ましい。
履修上の注意	履修生の積極的な参加を求める。
テキスト	特に使用せず。
参考文献	杉村伸一郎・坂田陽子　『実験で学ぶ発達心理学』ナカニシヤ出版　2004 渡辺弥生・伊藤順子・杉村伸一郎　『原著で学ぶ社会性の発達』ナカニシヤ出版　2008 山口真美・金沢創編著　『心理学研究法4　　発達』　誠信書房　2011

科 目 名	保育・教育課程研究		副題		
担 当 者	宮里　暁美				
開 講 期	後期	単位数	２単位	配当年次	１・２年次
授業の概要	一人一人の子どもの現状や課題を丁寧に見出し、次なる経験に繋がる保育の活動や環境をデザインしていく循環のプロセス等について、事例やＤＶＤを通して検討する。また、子どもとの対話的な関係の中から「学びの経験（履歴）」を編み出していくために必要な視点について、文献と実践を通して検討する。さらに、国内外の特色のある保育・教育課程について分担して調べ発表する。その内容を検討し、特色や相違点、共通点を整理する。また、グループディスカッションや全体討議の場面を多く設定し、学びを深めていく。				
授業のねらい・到達目標	１．幼児期の教育課程の特色について検討し、豊かな経験を生み出すための保育・教育課程を構成するポイントについて整理する。 ２．具体的な幼児の姿の背景に、保育・教育課程が存在していることを確認し、計画から保育へ、保育の省察から計画へ、という循環を支える営みについて明らかにする。 ３．遊びの中の学びに着目し、学びを生み出す、教育課程の編成方法を構想する。				

授業の方法・授業計画	
1	講義　保育の基本と計画：カリキュラムとは何か
2	講義　保育の基本と計画：保育・教育課程・全体的な計画の意義
3	講義　保育の基本と計画：遊びの中の学びを捉える
4	文献研究「子どもの世界の探求」①　子どもが感じる世界を感じる
5	文献研究「子どもの世界の探求」②　子どもと共に過ごすことの意味を考える
6	文献研究「子どもの世界の探求」③　保育と営みについて考える
7	保育観察①　保育の実際の中に身をおいたからこその気づきをまとめる
8	保育観察②　保育の実際の中に身をおき、自己課題に応じた学びを深める
9	発表・討議　保育の実際から気づいたことについて
10	発表・討議　保育の実際の中にある意味を深める
11	発表・討議　保育とは何か？
12	講義　国外の特色ある保育・教育課程
13	討議　様々な保育・教育課程の違いと共通点から見えたこと
14	討議　豊かな経験を生み出す保育・教育課程の編成について
15	講義　学びの振り返りとまとめ　（課題レポート提出）
期末	

授業に関する連　絡	個別のメール及び、でんでんばんを通して連絡をする。
評価方法及び評価基準	事例分析や討議への参加意欲：４０％ 資料準備及び提案内容：３０％ 課題レポート：３０％
事前・事後学習の内容	事前：特色ある保育・教育課程については、各自で資料を探し提案準備を行う 事後：授業内容を整理し、学びを深める。必要に応じて、資料整理を行う。
履修上の注意	特になし
テキスト	津守真・浜口順子編著『新しく生きる～津守真と保育を語る』フレーベル館、2009年 宮里暁美著『子どもたちの四季～小さな子をもつあなたに伝えたい大切なこと』主婦の友社、2014年 津守真著『子どもの世界をどうみるか　行為とその意味』ＮＨＫブックス1987年
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館,2008年、厚生労働省『保育所保育指針解説書』フレーベル館,2008年　吉村真理子著『保育実践の創造』ミネルヴァ書房、2014年